

東京都立産業技術高等専門学校

第8期 第2回 運営協力者会議

日 時:2025(令和7)年 11 月 21 日(金)15:00～17:00

会 場:東京都立産業技術高等専門学校 品川キャンパス

出席委員:大東工業株式会社 井上 浩

国立大学法人豊橋技術科学大学 江崎 将人

JAL ビジネスアビエーション株式会社 海老名 巖

地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター 片桐 正博

富士セイラ株式会社 高須 俊行

国立大学法人広島大学・大阪公立大学 高田 十志和

日本マイクロソフト株式会社 田丸 健三郎

株式会社 浜野製作所 浜野 慶一

一般社団法人エンジェルプロジェクト 村西 明

(敬称略・氏名五十音順)

運営協力者会議第8期第2回では新たに就任いただいた1名及び初めて参加いただいた1名を含めた運営協力者の紹介と挨拶、産業技術高等専門学校の出席者紹介を行い、次第に則り議事が進められた。

議題1 令和6年度の活動状況・各種取組について(説明:吉澤校長)

吉澤校長から、資料に基づき第四期中期計画と令和6年度における進捗状況についての説明があった。運営協力者から事前にいただいた質問に対して、できる限り説明の中で回答させていただき、あわせて説明を行った。

運営協力者から、以下の意見・質問があった。

<意見・質問> ○運営協力者 ●高専

【大項目 14】

- 産学公連携で行っているスタートアップ教育について、財務・事業計画といった側面でのアプローチも必要と考えるが、どうか。
- 本校のスタートアップ教育プログラムでは、NPO と協力してスターティング・アドバンスの2コースで募集を行っている。後者では、事業化を目指し経営に関する事柄について、起業家とのディスカッションなどを通じて学ぶ機会がある。
- 企業も含めた校外の方に、サポートを求めるアナウンスメントがあってもよい。
- ビジネスとしての成長を考えるのであれば、自由に動ける学生のうちに社会との繋がりを作ることが重要と考える。
- 今後もスタートアップ教育については展開を図っていく予定であり、そのような取組も考えたい。
- 高専の学生からは非常に面白いアイデアが出てくることがあるが、それを事業計画などに上手く落とし込むような実学・勉強ができるかという点ではないか。
- 前述のスターティングコースでは、学生のアイデアをプロダクトとして形にすることを目指している。そこから事業化に進むまでにはハードルがあるものの、スタートアップ立ち上げを目標に高専に入学する学生も出てきた。高専での勉強の先にスタートアップもあるという形でアクションをしていきたい。
- 小学校向け ICT・IoT 講座について、学生の進路選択におけるキーパーソンとなる保護者同伴での実施としたのは素晴らしい。同様に就職・進学においても保護者向けのガイダンスを実施・告知していくべきではないか。
- 中学生向けの講座でも保護者に来てもらった方がいいのではないか。
- 貴重な意見として参考にさせて頂きたい。

【大項目 15】

- 近年工業系の企業の統廃合が進む中で、以前のようなサプライチェーンの構築とそれによる品質保証が出来なくなっている。そのため QCD の担保のために、現場を知った上で設計ができる技術者の価値が上がっている。日本のものづくりの未来のためにも、基礎を知っている技術者を高専から輩出していくことには意義がある。

【大項目 16】

- 専攻科学力入試受験者の TOEIC スコアについて、顕著に上昇しているのがわかる。550 点を超えると一般企業でも通用するレベルと見なせるので、立派だと思った。スコア向上のために、何かしらの取組などはされたのか。
- 海外にルーツを持つ学生・帰国子女等の入学や、IEP 等で海外に行った経験を持つ学生の増加により、日常的に英語に触れる機会が増えてきたのが一つの要因ではないか。また、国際化推進センターでは毎週夕方にネイティブスピーカーを招いての英会話の機会の提供、浅草でのインバウンドに対する学生の英語案内体験といった取組を行っている。4年生の TOEIC スコアの平均が国立高専の平均を上回ったということで、高専全体で英語に対する意識が醸成されたのが、成果となったのではないか。

【大項目 17】

- コミュニケーションに問題を抱える学生がいるという話があったが、そういった学生に対してどのように対応しているのか。
- 学生相談室ではキャンパスごとにスクールカウンセラー2名、スクールソーシャルワーカー1名の体制で、担任・外部の医師・児童相談所といった団体組織とも連携を組みつつ学校生活のバックアップを行っている。
- 授業においては実験実習等を少人数グループで取組む中で、コミュニケーション能力を少しずつ伸ばしていくというのがまず第一歩である。ただ、就職活動の時期までにそれを上手く伸ばしきれなかったという場合、カウンセラーとの面談を重ねることになる。その他、就職においては企業とのマッチングを行うことで、それぞれの学生にあった行先を探すという積み重ねをしている。
- 高専の教育という面では、個々人の強みを見つけることで、学生に自信を持たせて活躍できるようにしていくのが役割と考えている。
- 企業にも学生の個々人の能力を理解してもらったうえで、納得して採用してもらうのが大事。学生を送り込むだけでは、学校としては難しい。
- 基本的に全員が授業料免除(無料)であるということは大変良い。大阪公立大でも全員無償となっており、ぜひ取組として続けてもらいたい。

【大項目 18】

- 高専の認知度を上げるのは非常に重要。他大学でも SNS 等のソーシャルメディアを中心に情報発信に力を入れているし、保護者もそういった媒体をかなりチェックしている。効果を上げるためにはターゲット層に合わせた媒体選択とこまめな発信がポイントであり、入学志願者の増加を狙うという観点からも個人的に大事な取組と考えている。
- 高専の情報発信という点では、Youtube のアクセス数が飛躍的に伸びている。広報チームの編集委員として学生を入れる取組についても、ぜひ若年齢層の意見を取り上げて時流に乗った広報を行ってほしい。また、予算の問題もあるが、上手い広報のためにはプロに依頼することも大事である。

【大項目 19】

- 研究機器共用センターについて、初期投資後のメンテナンスや継続利用のめどなどはどうなのか。
- こちらは都立大日野キャンパスで産学公連携センターとして開設されたものになる(TMU Innovation Hub)。2大学1高専のメリットを生かすため、教員や専攻科の学生も利用できる形態に法人として整備し令和5年度にスタートした。
- 高専の機器は非常に精度の高いものがあり、よく整備されていると思われるので、逆に都立大の学生・教員に高専の機材を貸出す取組を行うのも可能性としてあるのではないかと。学生交流という面でも提案したい。
- 2大学1高専の連携強化のためにも高専として PR をしていきたい。

議題2 高等専門学校機関別認証評価について(説明:ものづくり工学科長 小林 弘幸)

小林ものづくり工学科長から、資料に基づき高等専門学校機関別認証評価についての説明を行った。運営協力者から、以下の意見・質問があった。

<意見・質問> ○運営協力者 ●高専

- 日々の業務内で PDCA サイクルは回しているはずであり、それをなにごしかの形で残していけばゼロから審査のために準備をするということはないのではないか。業務化されることで受審に対しての内部の否定的な意見も減少すると思われる。
- おっしゃる通りで、PDCA を回すためのマニュアル等は存在するものの、規則として整備しきれていないという点が問題になっている。JABEE の受審をきっかけとして自己点検の仕組みの大枠はできており、今回の認証評価では学校全体での取組として、全ての教員の PDCA の整理に対する理解が得られるのではないかと考えている。
- JABEE は、認証評価や規則の整備のための受審であれば、意図として形骸化してしまう。高専全体の教育・業務の流れの中で、必要かどうかを判断のポイントとされたい。

- ものづくりメーカーはISOなどに制約されているが、質の向上のためにそれを受入れている。基準をクリアすればよいものが作れる、という手法を教育に応用したものが認証評価ということになるのであれば、受審は良い教育のため、学生の質の向上のためという意識を持った方がやりがいに繋がるのではないか。
- 内部質保証は最終的には学生の教育の質向上というところに繋がってくるので、高専の内部だけでなく、学生にも上手く浸透させる形でPDCAを回すことができれば、学生の教育に対する動機付けにもなるのではないか。

議題3 荒川キャンパスにおける副業先生の実施について(説明:荒川キャンパス教務主事 田村 恵万)

田村教授から、資料に基づき荒川キャンパスにおける副業先生の実施についての説明を行った。
運営協力者から、以下の意見・質問があった。

<意見・質問> ○運営協力者 ●高専

- 新しい取組で素晴らしい。予算等のネックもあると思うが、継続の予定はあるのか。
- 今年で2年目になるが、今後も継続していきたい。同じ教材では陳腐化するので、都度リニューアルし、できれば実務的な演習も授業に入れていきたいと考えている。
- 内容的には内部の教員でも実施可能と思われるが、あえて外部に委託した理由はあるか。アウトソースすることで教員の活動時間に広がり生まれるなど。
- この授業は1年生向けにコース分けの導入として実施している。教員も業務が多忙なので、外部の講師にやってもらう効果はある。また、教員が副業先生の授業を見学することで、教員自身の授業改善にもつながるのではないか。
- 教職の忙しさについてはよく言われるが、アウトソースした時間を教員自身の研究に振り分けることで教員の質の向上も期待したい。うまく活用して進めてほしい。

以上